

令和8年3月13日
八王子市立加住小中学校
校長 小川 博文

令和7年度 八王子市立加住小中学校 学校経営報告書

昨年度まで、アンケート回収率は2割程度であったが、今年度は、6割を超える回収率となり、よりこれからの学校経営に反映させることができた。来年度はさらに回収率をあげ、学校経営に反映させていきたいと考えています。

令和5年度の学校経営では、前年度までの反省を踏まえ、「安全で安心して楽しく学ぶ学校」を掲げ、学校が落ち着きを取り戻した令和6年度の学校経営では、「一人一人が活躍できる学校」を掲げた。今年度は、さらに児童・生徒、教職員、学校が成長できる学校とするため、「一人一人が挑戦できる学校」を掲げた。また、昨年度までの学校経営方針の4つの柱から「人間性と社会性の育成」、「学力向上」、「小中一体化」の3つを大きな柱とした。これは、引き続き、「人間性と社会性の育成」に重点をおくとともに、「学力向上」および「小中一体化」をより進めるためである。

昨年度と同様、特別支援教育の視点に立った教育活動を推進させ、一人一人の児童・生徒に寄り添うことを大切に個に応じた指導を行ってきた。学級活動および児童会・生徒会活動や行事の取組を通して、自治的活動を推進させたことによって、自己指導能力の育成につなげることができた。校内研究の推進、教員の自己研鑽、日常的なOJTの実施等により、授業改善に努めることができた。

小中一体化については、昨年度から始めた小学部1年生から中学部3年生による「学習発表会 合唱の部」を近隣大学のホールで実施し、さらに、小中合同体育祭を8年振りに本校舎校庭で実施することを通して、児童、生徒、教職員が協働して取り組み、小中一体化を推進させることができた。

学校運営協議会では、学校の現状を共有し、学校として取り組むべき課題を確認しながら実行してきた。また、学校運営協議会の委員によって、児童・生徒が参加できる地域行事を実施し、地域の方々と交流することができた。今年度は昨年度と比べ、地域行事に多くの児童・生徒そして教員が参加することができた。

(1) 豊かな人間性と社会性の育成 80%

①人権教育の推進

保護者による学校評価アンケートでは、人権に関わる教員の不適切な指導についての記載がほとんどなかった。3年間の成果だと感じる。多くの教職員が児童・生徒への声掛け等において人権に配慮し、丁寧な指導することを心掛けている。今後も全教職員が人権意識を高め、教育活動を行うことができるようにしていく。

人を傷つける言葉や乱暴な言葉を言う児童・生徒が見られた。「道徳科」、「学級活動」等で人を思いやる心を育て、全教育活動を通して学校全体で取り組んでいく。

②特別支援教育の視点に立った教育活動の推進

週に1回、小学部校内委員会、中学部校内委員会を開き、児童・生徒の情報共有および今後の指導方法等を検討し、共通理解、共通指導に活かすことができた。また、特別支援教室未来塾と通常学級との連携を密に行い、一人一人の児童・生徒に対して個に応じた丁寧な指導を行うことができた。特別支援教育に関する校内研修を3回行い、教員の特別支援教育を深めることができた。また、未来塾の教員による通常学級における理解教育の授業を行い、児童・生徒の理解を促すことができた。今年度より開設した特別支援学級小学部3組、中学部C組において、通常学級との交流および共同学習を実施することができた。また、行事において、学級として、学年として、参加することができた。

③生活指導の充実

職員室内では、児童・生徒の学習指導や生活指導について、学年や教科に関係がなく対話がなされ、報告・連絡・相談・記録の徹底がおおむねできている。

昨年度の課題であった「かすみスリー」・「かすみスタンダード」を学校全体で指導する徹底を図ることについてだが、昨年度に比べ生活指導主任のリーダーシップのもと、少しの改善は見られたが、まだ十分とはいえない現状がある。今年度は校長より具体的に「あいさつの遂行」「人の話を聞く」「物を大切にする」「時間を守る」ができる児童・生徒の育成を具体的に掲げた。しかしながら、「物を大切にする」「人の話を聞く」に関して課題が残った。

小学部において、落ち着かない学年が見られ、生活指導部を中心に学校全体で対応した。次年度は副担任2年目であるので、有効的に活用していく。

④自治活動の推進

各委員会活動では、おおむね児童・生徒の主体性を大切に活動することができた。各委員会において工夫した取組が見られた。今年度も各学年の学級活動では少し課題が残った。今年度は、委員会活動だけではなく、8年振りに本校舎校庭で実施した「体育祭」、初めてホール開催とした「学習発表会 合唱の部」において、中学部3年生を中心として児童・生徒が新たな取組を行った。

児童会・生徒会活動では、委員会活動および児童会集会・生徒会朝礼の充実を図ることで、日頃から児童・生徒が学校生活における出来事を自分事として捉え、学校の一員として責任をもって活動する場面が増えた。

⑤いじめをゆるさない集団作り

「加住小中学校いじめ防止基本方針」のもと、いじめの未然防止、早期発見、早期対応等を行った。また、毎週水曜日の5校時に行ういじめ対策委員会では、児童・生徒によるいじめに関するアンケート（6月、11月、2月）、本人や保護者の訴え、児童・生徒からの情報等から「いじめの種」としてあげ、本人への聞き取りとケア、関係児童・生徒への聞き取りと指導について丁寧に確認し、解消に向けて組織的に取り組むことができた。さらに、小学部高学年、中学部においてQ-Uを2度実施し、いじめの早期発見につなげている。

児童会・生徒会が「はちおうじっ子サミット」の取組を通して、いじめのない学校生活について全児童・生徒が考える機会をつくることができた。実際に中学部では、2学期後半より、「いじめの種」の件数が0となり、小学部では、「いじめの種」を見逃さない学級活動を行っている。

⑥サービス事故防止（体罰防止）

管理職による定期的な研修や定期的な発信、そして、個人面談を実施することで、教職員に教職公務員としての高い意識をもたせ、サービス事故を起こさないよう、学校全体で取り組むことができた。

⑦地域行事への積極的な参加

学校運営協議会の委員が中心となり、月に1回の加住ふれあいコミュニティ、夏季休業中にサタデースクールを実施し、多くの児童が参加し、数名の中学生がお手伝いに参加した。青少年対策加住地区委員会主催のクリーンデーでは、生徒会役員の生徒を中心に多くの生徒が参加した。また、少数ではあるが、小学部の児童も参加することができた。3月に行ったクリーンデーでは、過去最高の参加人数となった。次年度は、さらに多くの児童・生徒が参加できるように工夫した取組を行っていく。

（2）学力向上 70%

①授業改善

学期に1回以上行う管理職による授業観察の際には、略案を作成し、授業後に振り返りを行うことで授業改善に努めることができた。さらに、教員相互で授業の参観を行った。

今年度は、1時間の授業において「めあての明確化、主体的・対話的で深い学び、振り返りを大切にした授業」を行えるように努めた。

全教員が1年間を通して、他校の指導教員による授業や研究発表校の公開授業を参観し、自身の授業力向上につなげることができた。

児童・生徒による授業アンケートでは、授業内容に関しての肯定的意見が小学部では約9割、中学部では約8割であった。

昨年度より、高学年の教科担任制を実施し、教員の教科の専門性を高めながら、授業を実施した。一方で、市の学力調査の結果から、学力向上にはつながっていない現実がある。今年度より、学力調査委員会が実際に学力検査の分析を行い、周知はできたものの、その後の取組等についての検討ができなかった。次年度は、分析結果から児童・生徒が必要な学習内容や取組を検討し、実行できるようにする。

②家庭学習の定着

アンケート結果および教員による振り返りを行った。小学部の児童の実態を把握し、担任や教科担当が宿題等を工夫することで、小学部の約9割の児童が毎日家庭学習を行っている。中学部では、生徒の実態を把握し、各教科担当の教員が生徒に合わせた課題を考え、また、学習計画表の活用や補習授業を利用する等の取組を行ってきたが、約5割の生徒が家庭学習を行っている結果にとどまった。次年度に向け、中学部においても生徒の家庭学習が定着できるように努めていく。

③朝読書

小学部1年生から中学部3年生による朝読書を昨年度から始めたが、中学部においてはしっかり取り組んでいる。一方、小学部においては、一昨年度までの取組や発達段階等により、静かに本を読むことが苦手な児童がいるので、各学年や各児童に応じた取組み方を検討していく必要がある。

④校内研究の推進、小教研・中教研の積極的な活用

研究主任を中心として、今年度の校内研究テーマである「基礎・基本の定着と主体的で深い学びを創造する授業づくり」を指導案計画からグループごとに検討し、研究授業に臨み、外部の先生を講師に招き、学びを深めた。

小教研・中教研での公開授業や学んだ内容を実際に自らの授業で行うなど、積極的に活用できた。

⑤自習教室・補習教室の充実

放課後の学習教室や夏季休業中の学習教室を小学部、中学部それぞれで設定し、児童・生徒が意欲的に学べるように取り組んだ。小学部では、算数少数担当の教員が中心となり、児童が参加しやすい学習教室を行った。中学部では生徒会が学習を呼びかけるなど工夫を行った。さらに参加する児童・生徒が少しでも多くなるように工夫して取り組んでいく。

中学部においては、定期考査一週間前に自習教室を開き、定期考査への意識を高め、日頃の学習の必要性を感じさせることができた。

次年度は、学習教室の回数を増やし、やり方を工夫する。

⑥ICTの有効的な活用

毎週金曜日の朝の時間をGIGAの時間とし、各学年に応じた課題に取り組んだ。一方で、担任まかせとなってしまうと、計画内容と違う取組をしていた学年もあったので、次年度は、GIGA・研修部の教員がしっかり確認しながら行っていく。

⑦小学部高学年より教科担任制を実施 ①に明記

(3) 小中学校の一体化 95%

①小中一貫校の教職員としての意識

今年度は、昨年度から実施した小学部1年生から中学部3年生による「学習発表会 合唱の部」を近隣大学のホールでの実施や体育祭を8年振りに本校舎校庭での実施を通して、児童・生徒、教職員が協働して取り組んだことにより、小中学校の教員としての意識を高め、小中一体化を図ることができた。次年度は、今年度の反省を活かした取組としていく。

②校内分掌の一体化の推進

小学部5、6年生の家庭科、6年生の英語科において中学部の教員による乗り入れ授業を1年間通して実施することができた。また、国語科、社会科、体育科、音楽科、算数・数学科において、小学部の教員と中学部の教員が学び合う姿が見られた。

児童会と生徒会が合同で行う中央委員会を設置し、小学部の児童と中学部の生徒の連携を図ることで自治力を高め、リーダー性や社会性を養うことができた。

今年度は、昨年度大きく変更した校内分掌組織体制2年目である。小学部の教員と中学部の教員のスムーズな連携が図られた。